

スコットの二面性 (Duality) について

- *Old Mortality* を中心に -

佐藤 猛 郎

I

スコットの *Old Mortality* (供養老人) ①は 1819 年に出版された作品で、スコットの小説第 5 作にあたる。この *Old Mortality* と呼ばれる人物は、1670 年代にスコットランドで起った長老会派宗徒の反乱に加わり、命を落した幾多の敬虔な信徒たちの墓碑銘が、年を経るにつれ、崩れかけて来ているのを悲しみ、鑿で刻み、供養をほどこしながら、戦跡をめぐり歩く老人で、彼と親しくなった村の小学校教師 Peter Pattieson が、老人の語る戦乱の思い出話を記録にとどめる、という形式でストーリーが展開する。

主人公は Henry Morton といひ、彼の父は、クロムウェル時代には議会派、その後の王制復古の時代には王党派に属して、武勲をあげた Silas Morton 大佐である。Henry は近くの Tillietudlem 城に住む、王党派 Bellenden 夫人の美しい孫娘 Edith と恋仲になっているが、ひよんなことから、曾て戦場で父の命を救ったことのある戦友で、今は反乱信徒のリーダーとなっている Balfour of Burley をかくまったため、政府軍のきびしい追及を受ける羽目となり、あわや処刑という時に、Edith の懇願に動かされた政府軍の将校 Evandale 卿の取りなしで、命は救われたものの、「自由人」の権利を踏みにじられたことに憤り、「戦乱の悲惨と残虐を少しでも柔げる」ために、彼は心ならずも反乱軍に加わる。流血を最小限にとどめ、和睦を結ばせようとする彼の努力も、徹底的な弾圧政策をとる政府軍と、狂信的信徒たちの間では効果もなく、悲惨な戦いの後に反乱軍は敗れ、彼は裏切り者として、過激派の信徒に処刑される寸前、政府軍の Claverhouse 大佐によって救出される。

Henryは反乱軍に加わった罪で国外に追放されるが、その後間もなく英国本土では数々の失敗のため、スチュアート王家が廃され、ハノーバー王朝に変わっている。Henryは、15年後再び故郷の土を踏むのだが、Edithがまだ彼を愛していて、Evandale 卿とは婚約したものの、結婚を拒み続けているのを知り、二人の幸福のために、永遠に身を引く決心をする。所が名誉革命後の世情不安に乗じて、Tillietudlem 城乗取りをたくらむ悪人Basil Olifaunt 一味との争いで、悪人共も亡ぼされるが、Evandale 卿も仆れたため、HenryはEdithと結ばれ、Tillietudlem 城の後継者になる、というのがその梗概である。

発表当時から、この作品は好評裡に迎えられ、J. G. Lockhartも、“*Mirion of his novels*”②と述べて賞讃している。スコット自身も、この作品にはかなり自信があったらしいことは、伝記、手紙の類でも判る。③ 19世紀当時は、一般に、政府軍、反乱軍双方の客観的な公平な取扱い方、登場人物の生き生きとした性格描写が賞揚され、例によって、主人公のHenryやEdithの生氣に乏しい性格が物足りないとの批判を受けていた程度だったが、今世紀の中葉になって、Conflict（対立）のパターンを追求することによって、この小説のより深い説明がはじめられるようになった。

題材からも判るように、この*Old Mortality*は、小説第1作*Waverley*（1814）と同様に、一口に言って典型的な「対立」の小説である。一般に、この第1作の名を冠した*Waverley Novels* 全体が、この「対立」を骨組みとした作品群であるが、これ程峻烈な形で、その「対立」が追求された小説は他に例をみない。しかし、Lukács④やDaiches⑤が設定したヘーゲル風の *Heroic and Barbarous Past* から、*Commercial and Civilized Present* への推移途上における「対立」というパターンだけで、この作品を解き明かそうとすると、なお不十分な点も多い。又彼らの楽観的かつ単純な「社会進化論」には、殆ど背を向けたような内容が、この作品の随所に盛られているように思われる。Daiches が言う所の「魅惑的ではあるが危険な過去」から、

「平凡ではあるが文明化した現代」への歴史の推移に、「溜息をつきながらも」一応満足する作者の視点も、*Waverley* や *Rob Roy* (1817) では明瞭に認められるが、*Old Mortality* においては、非常に曖昧になつてきているのに気付く。

殊に *Old Mortality* の Anti-climax 部にある息苦しいまでの悲劇性は、スコットがどうしても和解できなかつた歴史の流れへの憤りがこめられているように思われる。こゝには、*Waverley* の特徴となっているノスタルジーもないのだ。Daiches は、*Old Mortality* の悲劇性は、Henry や Evandale などの「妥協」的人物が、社会に受け容れられないことに起因する、と述べている。⑥ 確かにこの意見にも一理はあるが、私には、スコットの意識のもっと深い所にかゝわりあいのある、スコットランド知識人としての「嘆きの声」がそこにあるように思われる。この作品の暗さのもとになっている、容赦ない歴史の流れに対する一種の「恐怖」或いは「不信」は、この *Old Mortality* ばかりでなく、*The Bride of Lammermoor* (1819) や *St. Ronan's Well* (1823) に色濃く表現されている。このようなことを考慮に入れるならば、*Old Mortality* を考察する際にも、「野蛮な過去」から「文明化した現在」への進歩といった一方的な史観に固執せずに、過去と現在との間に、微妙に揺れ動く作者の2重の視点を探り、同時に王党派と反乱軍との対立に伴なり社会的、個人的なかかわり合いを、スコットはどのように理解し、表現しようとしていたかを探る方が妥当であるように思われる。

又こういったテーマについてのスコットの扱い方を辿っていくと、Conflict (対立) というパターンでは説明できない関係も多く示されているのに気付く。

“Contrast” (対比) という概念を用いたほうが適切な場もある。⑦ 私はこの2つに加えて、“Analogy” (類似)、“Juxtaposition” (併列) とでも名付けることができるような関係も見出すことができるように思う。

「対立」ばかりでなく、「対比」とか「類似」とかという見方をすゝめて行くと、

*Old Mortality*だけでなく、広くスコットの作品全体に、こういった関係が絶えず求められているのに気付く。*Ivanhoe* の Richard 王の性格描写もそうだったが、有名な James 一世の性格描写などは、まさにこの「対比」の典型と言えよう。

He was deeply learned, without possessing useful knowledge; sagacious in many individual cases, without having real wisdom; … fond of his dignity, while he was perpetually degrading it by undue familiarity ……
He was laborious in trifles, and trifler where serious labour was required; devout in his sentiments, and yet too often profane in his language. ⑧

(彼は博学ではあったが、役に立つ知識は持たず、個々の事柄に関しては聡明だが、真の叡知は持たず、自らの威厳を好むが、度を越えた慣れ慣れしさで、常に品位を下げ、……些細な事には熱心だが、重大事には、茶化すことしかせず、心の中では神を敬いながら、口に出すのは罰当りの言葉ばかり……)

このような例からも判るように、常にあるものを二重の視点から見るのがスコットの特徴のように思われる。そして、スコット文学の根本となっているのは、スコットのこの Duality (二面性) に他ならないのだという観点から、私は *Old Mortality* に見られる「二面性」を、「対立」「対比」「類似」などの関係を中心に次に探って行きたいと思う。

II

まず主題の面から *Old Mortality* の「対立」関係をみると、*Covenanter Insurgents*（盟約反乱軍）と王党派政府軍との対立がその中心となっているのは言を俟たない。この対立は、人々の意識の上で、中産階級や農民層 *Old Mortality* においては、しばしば *Whig* の名で呼ばれている）と貴族や地主からなる支配層との対立とも重なっている。この「対立」の主題は、物語の最初から一貫して底流として流れ続け、常に陰鬱な雰囲気をかもしだし、悲劇的切迫感を高めている。

次に小説の構成の面でみればどうかというと、*Drumclog* における反乱軍の勝利と、*Bothwell Bridge* における政府軍の勝利が一對をなしている。その上、*Welsh* も指摘しているように、前者においては、Henry が、政府軍による処刑を危うく免れ、後者においては、反乱軍による処刑を、同じように辛うじて免かれていることなども、決して偶然の一致ではあるまい。^⑨ 又 Henry の国外追放を境にして、スチュアート王朝時代とハノーヴァー王朝時代が対比されている。スコットは、Henry や *Evandale* の口を借りて、スチュアート王朝の失政を責め、匿名で 1817 年に、*Quarterly Review* に寄せた自作批評においても、信仰問題を弾圧によって強制しようとした当時の政策を非難し、ハノーヴァー王政が採用した「寛容」こそ、人心を収攬する最上の方策なのだとして述べてはいるが、^⑩ このハノーヴァー時代を、Henry のように数々の美德を持った人物が、身を寄せる所一つない時代として描くことによって、スコットは、このスチュアート時代からハノーヴァー時代へと移って行く歴史の流れに抵抗を試みているようである。（尤も Henry が遂には *Edith* と結ばれ、幸福を掴むという結末は、最終的には、スコットもハノーヴァー王朝の新しい時代に、「溜息」をつきながらも和解していくのを示すパターンにもどったことを示してはいるのだが。）

こうしてみると、*Old Mortality* は「対立」や「対比」が非常にくっきりと浮かびでていて、スコットには珍らしく簡潔な構成を持った作品であることが判

る。構成の面だけから言えば、Bothwell Bridge における反乱軍の悲劇的敗北で終れば、一番すっきりするのだが、スコットはこの種の歴史的事件が、社会、個人にどのような影響を与えるのかを述べたいと思っているのだから、やはり、37章以下は必要なのであり、逆に、Welsh が言うように、この Anti-climax の部分に、スコットの強調したい主題が含まれているのである。^⑩

次に眼を王党派、反乱信徒の両陣営に向けてみよう。両陣営とも、Daiches が Symbolical Observer と名付けた所の作者の代弁者たる Henry によって、「残酷」「冷血」の烙印を押された Fanatics (狂信者) の集団である。この作品が一面 Fanaticism (狂信) の研究と呼ばれる由縁もここにある。そして、両陣営共、その冷酷さ、残虐さには、段階が設けてある。これは、前述のスコット自身の批評にも解説してあるのだが、反乱軍側では、狂信の度合いに応じて、低い方から、憶病な理論家 Poundtext、煽動者 Kettledrummle、熱烈な信仰に燃える Macbriar、狂人の Mucklewrath と順に名付けてある。^⑪ これに博愛と信仰心をあわせ持った Bessie Maclure、冷酷な野心家 Burley 無知な宗教狂いの老婆 Mause、その息子で日和見の Cuddie を加えれば、スコットの頭の中に描かれた反乱信徒群像が完成する。王党派側では、Evandale 卿、Monmouth 公、Bellenden 少佐、Bellenden 夫人、Bothwell 軍曹、Claverhouse 大佐、Dalzell 將軍の順で、冷酷さの度合いが激しくなっている。又 R. C. Gordon が指摘するように、両軍とも、一般の兵士は、指揮官の強い統率がないと、内輪もめや、反乱などを起す傾向があるなど、非常に明瞭な「類似性」をもっている。^⑫ スコットの場合、登場する人物はすべて「シンボル」となっていると考えてよい。だから、これらの人物像は、それぞれの相互の「対比」によって、それぞれの陣営を象徴していると見做すことができよう。

次に個人対個人の「対比」「対立」に目を転じてみよう。この作品では、主として、Henry を基準にして、すべての人物が対比され、又逆に、Henry 自体も、常に彼らからの対比の対象となっている。J. E. Calder はこれに、“Dual

Measurement”という言葉をあてている。¹⁴ 理性的知性を備え、自由や正義を愛するこの主人公が理想とし、追い求めるものは、スコットの他の作品の主人公の場合と同じように、又スコット自身の場合と同じように、裕福な地方貴族の生活である。そしてそのシンボルとなっているのが、Tillietudlem の城であり、そこに住むEdith姫なのである。スコットにあっては、Edithばかりでなく、大抵の女主人公は、美しいだけで、性格の掘りさげが足りないとの批判も多いが、多くの場合、彼女達は、本質的に、十分な美德を備えた主人公によってのみ達成される理想の「シンボル」であるためにそうなるので、彼女達の性格の奥底を探究し、その本質を曝露するなどということは、スコットの意図とは速く離れたことなのだ。そして、この理想達成の道に立ちふさがるのが、まず、恋のライバルEvandale 卿と、Tillietudlem 領を窺う悪人Basil Olifaunt なのである。物語の終結部でやっと姿を現わし、忽ち殺されてしまうBellenden家の遠縁にあたるこのBasil Olifaunt の役割りについては、構成上不可解の要素が多く、従来謎とされていたのだが、Welshが説くように、領地に関するHenryのライバルと見ることによって、彼の存在価値が明確になる。しかも、興味深いことは、彼は古い世界の人間ではないということである。彼は、目的のためには、法律をたてに、陰險な手段を使うことも厭わず、カトリックに改宗することも敢えてする偽善者で、しかも「暴力」よりは「法律」を第一とする「新しい」タイプの悪人なのである。新しい型の人物を不徳漢に描くことによって、スコットは新しい時代に対する不信を表明しているのではないだろうか。又Tillietudlem 領の権利証をBurley から提供された時、EvandaleとEdithの幸福のために、きっぱりとこれを拒んだHenryの紳士的、乃至は騎士的態度も、この卑劣な物欲の権化とも言うべきOlifauntとの「対比」において、一層はっきりと理解できるわけなのである。(ch. 43)

Henry とEvandale 卿との関係は、冒頭のWappenschaw と呼ばれる射撃競技に始まる。¹⁵ Edithが見守る前で、Henryが優勝し、Evandaleが

2位となる。二人は共にEdithに心を寄せてはいるが、又共に「騎士的」であり、共に理性的な良識家として、王党派と反乱軍の中であって、互いに尊敬し合い、流血を防ぎ、平和をもたらすために協力する。二人はスコットの称する“Race of generosity”(親切合戦)(ch. 24)において、交互に恩義をほどこす。Henryは政府軍に処刑される所をEvandaleに救われ(ch. 13)、一方EvandaleはDrumsclogで戦闘中に、Henryに命を救われる。(ch. 17)又その後、Henryによって、Burleyの手からEvandaleは再び救われ(ch. 24)、HenryはEvandaleの尽力で、和睦の使者として、Monmouth公に会見を許される。(ch. 30)

作者はEvandaleのように、教養豊かで紳士的なライバルを設定することによって、ことさら青年Henryの不安と、Edithに具現された彼の夢を達成することの困難さを示しているものといえよう。共に教養もあり、知性に恵まれたライバル同士なので、貴族階級に属さないHenryにとって、その夢の実現は全く絶望的になる筈であるが、スコットは、Evandaleを古い世界の人間とすることによって、この問題を解決している。Evandaleはスチュアート王朝の失政を常に非難し続けてはきたが、彼のこの王家に対する忠誠心は変節を許さない種類の、いわば主従の絆ともいべきものなのだ。彼が名誉革命後のハノーヴァー王家に忠節を尽すことは、彼の「名誉」が許さないのだ。「理性的」には無謀とのそしりを受けようとも、反政府の旗印のもとに決起しなければならないし、又曾ての上官のClaverhouseが斃れた後は、彼にかわって、反乱軍の指揮もとらなくてはならないと彼は心を決めているのだ。(ch. 38) 結局彼は「理性」よりも「名誉」を重んじ、古い身分関係の中でしか生きられない古い型の騎士道のシンボルであり、歴史の流れを生きのび、新しい社会に適応するには不適當な人物なのだ。やはり、このようなこだわりのないHenryのような人物にこそ、新しい世界の夢が托されるべきなのであろう。

このEvandaleとHenryとの関係と密接な「類似」を示しているのがCud-

die である。Cuddie は宗教狂いの母Mauseの言動がもとで、雇い主のBelenden 夫人に職を追われ、Henryの従者となり、無教養ではあるが逞ましい、現実的なスコットランド農民のシンボルとなって活躍するのだが、Henry—Edith—Evandaleの三角関係をそのまま写したような三角関係を、CuddieとEdithの小間使いJenny、それに政府軍の兵士Tam Hallidayとで構成している。又彼は「紳士」であるが故に、数々の束縛を受けているHenryに対する「庶民」の側からの「対比」となっている。Wappenschawの射撃大会にも、彼は恋人のJennyに、腕前を見せたくて、母にかくれて参加し、Henry、Evandaleに次いで3位となる。(ch. 3)「紳士」のHenryはEdithのために出場したのだなどとは言えない。所がそこは庶民の強みで、Cuddieは本心を平気で口にするわけだが、この告白が又ひるがえって、Henryの本心をも暗示している。

政府軍に捕えられたHenryは恋人のEdithの懇願に、ライバルのEvandaleが動かされることによって助命されるのだが、一緒に捕えられていたCuddieもJennyが恋仇のTam Hallidayに取り入ることで救われることになり、共に彼らに嫉妬の心を抱く。所が現実派のCuddieは、Jennyは多分自分を救うためにTam Hallidayにやさしくしているのだから、Jennyを責めるわけにはいかないと一応満足しているのに反し(ch. 14)、Henryは一途に絶望し、拳銃の果てに、反乱軍に加わろうという一大決意を固めるに至るのだ。彼個人の全人生がかゝっていたEdithへの愛が奪われた時、Henryの心の中に大きな変革が行われ、にわかには歴史を生きる社会人としての意識が湧き起きてきたわけなのだ。彼は「戦う男」に変身する。

Desperate himself, he determined to support the rights of his country, insulted in his person.
(ch. 13)

(絶望の余り、彼は彼自身に関しては踏みにじられた彼の国家の権利を侵

害から守ろうと決意した。)

スコットは、Henryの心理を例えて、「平和な生活を営む家が、突然武装した兵士に侵入されて、堅固な砦に変容」したようなものだと述べている。(ch. 13)

所でこのHenryとCuddieとの「対比」には、2つの面がある。その1つは、現実的なCuddieに比べて、Edithの愛に関するHenryの判断は、余りに自虐的で、正確でないという点である。世間知らずの彼は一途に絶望してしまうのだが、事実Edithの愛は少しも変わってはいなかったのだから。もう一つは、無学なCuddieとは到底比べものにならないHenryのもつ象徴性である。彼のもっている社会歴史観は、ひろく全国民を包含するまでの歴史的意義を、自らを襲った一連の不快な事件の中に見出すのだ。彼は政府軍の非人道的な圧制と、これに反撥する反乱軍のこれに劣らぬ残虐性に失望し、荒廃した祖国を救い、平和をとり戻し、戦争の悲惨さを和らげるために反乱軍に身を投ずることを決心する。しかし、彼の冷静な理性は、Bellenden少佐によって“rebellious in cold blood and without even the pretext of enthusiasm” (熱情に駆られたためとも言わずに、冷やかに謀反に走るとは) (ch. 25) と評される。彼の冷やかな知性は勿論熱狂した反乱軍の間で、全く相容れない性質のものなのだ。

反乱軍に加わったHenryとCuddieは共にBellendenの家族と政府軍がたてこもるTillietudlem城を攻撃する羽目となる。Henryは正面から、Cuddieは裏手から城を攻めるのだが、共に“Red-coats”(政府軍兵士)だけ狙い、家族や使用人には一指も触れぬよう命ずる。(ch. 25) 反乱軍の敗北後、Henryは亡命し、15年後にCuddieと再会する。時はハノーヴァー王家の時代である。変わり果てた祖国に立ち、Edithへの絶望的な愛に苦しみ、知性人のシンボルHenryは悲しみに打ちひしがれている。これに対して、Cuddieは、Claverhouseとその一派が、新王家に反対し、時々反政府の騒ぎを起しているが、一般民衆の生活は、大体落ち着いてきているという楽観論を述べる。(ch. 37)

彼は雑草のように逞しく、政変を生きぬく常識豊かな大衆のシンボルなのだ。彼は母のMauseに対しても、信仰心も度が過ぎれば、雇い主の不興を買って家族が路頭に迷うようになるのが関の山だといってたしなめたりもしている。(ch.8) 又この小説の終りで、悪人Basil Olifauntを射殺するのもCuddieの役なのである。(ch.44) スコットは「紳士」のHenryに殺人を犯させるわけにはいかない。Cuddieは「庶民」の身軽さから、Henryの代わりに、Henryの敵を倒すわけなのだ。Cuddieは全体的にHenryと行を共にし、ある時は内気なHenryの代弁者となり、又ある時は、Henryの知性と象徴性を浮き彫りにする「対比」となっているのだ。

Henryと政府軍の指揮官Claverhouseとの「対比」はHenryが彼の手によって、狂信徒たちから救われた時に一番鮮明に描き出されている。ClaverhouseはFroissartの作品を読んだことがあるとHenryに聞く。(ch.35) Froissartが歌った中世騎士道がClaverhouseの世界なのだ。騎士道をわきまえた人物ならば、敵であろうと味方であろうとClaverhouseは好意を抱くのだ。HenryはBellendenの家族やEvandaleに対する数々の紳士の行為によりClaverhouseによる評価も変わり、敵よりむしろ友人として扱われるようになる。(ch.30)

Claverhouseは又Henryに彼独特の「死」の哲学を披露する。

It is not the expiring pang that is worth thinking of in an event that must happen one day, and may befall us on any given moment — it is the memory which the soldier leaves behind him, like the long train of light that follows the sunken sun — that is all which is worth caring for, which distinguishes the death of the brave or the ignoble. (ch.34)

(いつかは来る運命にあり、又いつなるとき我が身に降りかゝるかもしれない死に直面して、考慮する価値があるのは死の苦しみではない — 落日後に残る輝やきのように、戦士が残す武勲の記憶、これこそ考えるに値するすべてののだ。そしてこれが勇者の死と雑輩の死とを区別するものだ)

これは、後世吟遊詩人に歌われる名誉のため、美しく勇ましく死ぬことを理想とするオシアン風騎士道の思想でもある。Froissart といひ、オシアンといひ、Claverhouse は古い騎士道精神の体现者ではあるが、その雅さの中に、恐るべき冷酷さを秘めた人物である。彼はHenryに、狂信徒と同じように「無慈悲に人命を奪う」ことに関して詰問された際にも、「学職ある僧侶や、貴族、紳士の血を流すのと、身分の低い職人や愚かな農民の血と流すのとでは、高貴なワインをこぼすのと、汚らわしいビールをこぼす位の違いがある」と平然と答える。(ch. 35) Mayhead も述べていることだが、彼は一見洗練された文明の側に立っているかのようにみえて、実は「野蛮」「未開」の世界に属しているのだ。^⑩ これに対して、Henry(つまりスコット)は次のように言っている。

“Your distinction is too nice for my comprehension, … God gives every spark of life — that of the peasant as well as of the prince; and those who destroy His work recklessly or causelessly, must answer in either case …”(ch. 35)

(あなたの区別は余りに微妙で私には理解できません。神は王侯であろうと百姓であろうと、すべてに生命の火を与えているのです。主の御業を恐れ気もなく、理由もなく破壊するものは、いずれにせよ、その報いを受けなくてはなりません)

次にBalfour of BurleyはHenryとの対比において、さまざまな性質を示す。父の恩人であるが故に、彼をかくまったHenryに対して、彼は信仰の敵ならば、隣人であろうと、親友だろうと刃にかけるべきだと述べて、humanity

の欠除を示す。(ch.6) Claverhouse の甥で、白旗をたずさえ使者となった Cornet Grahame を射殺するなど、戦場の掬も無視する。(ch.16) Tillietudlem 城内を略奪しないという Henry との約束も反古にする(ch.27) など、一貫して彼は反乱信徒の「冷酷性」「偽善性」「野獣性」のシンボルとなっている。権勢欲にとらわれた彼は、名誉革命後もその政局に強い不満を示し、曾ての敵 Claverhouse と手を組んで反政府の陰謀をめぐらす。彼が隠れ住む山奥の谷間にある洞窟が、彼の属している世界を如実に示している。この付近の物凄い情景を、スコットが “equally romantic and precarious” (ロマンチックではあるが危険な) という表現で描いていることは興味がある。ここを訪れた Henry が Burley との対決を迫られた際に、「父の恩人を殺すわけにはいかない」と、向う岸に飛び移ることから、Henry が遂に過去のロマンチックではあるが野蛮な世界に別れを告げるに至ったことと暗示していると言えよう。(ch.43)

又この Burley と Claverhouse とは「類似」の好例となっている。この二人は両陣営における好一対なのだ。Claverhouse は Henry に向かって、「我々は共に狂信者なのだ」と言う。(ch.35) 二人共、主義のために人の命を奪うことを何とも思わない。又共に住む世界が過去の世界に余りに密着している故に、新しい世界には同調できず、反乱軍として手を結ぶに至る。目的のためには手段を選ばず、曾ての仇敵と協力することに、いさゝかの矛盾も感じないのだ。又二人共「悪魔」的に描かれているのも共通である。勇猛且つ冷酷な Claverhouse は反乱信徒の間では悪魔の化身と噂され、彼が乗る黒い駿馬は、信者弾圧のために、悪魔に贈られたものと信じられている。(ch.11) 鉛の弾丸では、悪魔の化身 Claverhouse には当たらないと信じられていたので、信徒の多くは銀貨を鋳つぶして弾丸としていた程である。(ch.16) 所が一方 Burley も、例の隠れ家の場面で、悪魔のイメージで描かれている。

His figure, dimly ruddied by the light of the

red charcoal, seemed that of a fiend in the
lurid atmosphere of Pandemonium. (ch. 43)

(彼の姿は赤い炭火のあかりで、ぼんやり赤く染り、伏魔殿の燃え上る熱気に包まれた悪魔の姿のようだった)

その他の「対比」「類似」としては、「何物も信じず、何物も恐れず」に殺された政府軍の Bothwell と、信仰に燃えて、従容と処刑された Macbriar、Charles 二世への忠誠に凝り固まった Bellenden 夫人と、同じく教義に凝り固まって、王党派を呪う Mause、それに、反乱軍への参加をはっきり告白し、いさぎよく処刑された Macbriar に対して、人はいつどこにいたかなど、はっきり覚えているものではないなどと、のりくらしと答えをはぐくらし、遂には罰を逃れた Cuddie など、数多くの parallel が設定されている。スコットは、ある場面、人物を描こうとするときには、常に、こういった parallel によって輪郭を明確にしているのだということがわかる。

最後に、この二面性の第3の型として、個々の事柄、人物の二面性を調べてみよう。これは、Henry の aspiration のシンボルともなっている Tillie-tudlem 城の描写に一番極立って示されている。城の正面は耕やされた沃野や手入れの行き届いた木立ちが広がり、一方裏手は荒涼とした原野と陰鬱な丘陵が続いている。(ch. 11) この城をめぐる、新しい豊かな時代と、古い伝統に根ざす未開社会とが互いに衝突し合うというこの物語のテーマがこゝにはっきりと示されているようだ。

次に登場人物に関してだが、人物の「二面性」は、大抵、ディレンマという形で示されている。まず主人公の Henry だが、彼も常にディレンマに悩まされている。彼の父 Silas Morton 大佐が、初めは議会派、後には王党派の軍人であった経歴からも判るように、Henry も生れながらに、ディレンマを身につけている男なのである。彼は長老会信徒派からも、王党派からも、味方と見做されながら、その実、常に不信の眼を向けられている。信徒ゆかりの彼が、Wappenschaw の競

技で勝利を得たことで、信徒側は大いに喜ぶが、Henry本人は、心情的に、王党派に傾いているのだ。勿論愛するEdithの故ということもあろうが、彼のリベラルな「理性」が頑迷な信徒達の考えと相容れないのだ。彼はむしろ王党派に捕われている時の方が、違和感は少なく、落ち着いていられる程なのだ。(ch. 33) 彼は政府軍の暴虐と反乱軍の狂信の双方に絶望している。(ch. 6) そして、彼は国民として、国家及び王に対する忠誠をあくまでもつくすべきか、その国家権力の「人の道」に外れた非道によって、「人間としての権利と自由」が犯されれば、これを守るために、断固国家権力に抵抗すべきかの相剋に迷う。(ch. 10)

又帰郷場面で、彼は礼節と重んじる紳士であるが故に、婚約に対しても、神聖視すべからざるものという観念を持っている。そのため、EdithとEvandaleが婚約したことを聞けば、Edithが未だに自分を愛していることを知つていても、自分の愛は捨てて、二人の幸福のために身を引く決心をしなくてはならないのだが、彼の全生涯をかけたEdithへの愛とのディレンマの末、最後に一目会いたいと、亡霊のような顔を窓辺にのぞかせる。このことから幽霊騒ぎが起り、Edithは、死者までがこの不吉な結婚に反対して姿を現わす上は、どうしても結婚に踏みきることができないとEvandaleに訴えるのだ。(ch. 38)

このEdithは、Henryへの愛と、Henryが反乱軍へ入ったことによる絶望感との間に揺れ動く。Gordonも説くように、スコットにあっては、社会的環境が、そこに居る人間の意識や思想を支配している。だから、Henryが反乱軍に入ったということは、王党派に属するEdithにとって、絶対に相容れることのできない世界に足を踏み込んだわけで、「彼が死んだら私も死ぬ」(ch. 10)とまで思い込んだ彼女の愛をもってしても、二人の仲は全く絶望的なものとなるのだ。⑰

又当然Edithは二人の求婚者の中で迷う。計算高い現実家のJennyは常識的な助言として、しきりに条件のよいEvandale 卿をすすめるのだが、Edithは愛の変節をうけ容れず、Henryを愛しつづけ、王党派も長老会派もない名誉革命後の治世下に至って、しかも、Evandale 卿が凶弾に斃れた後になって、はじ

て二人は結ばれるのだ。

又前にも触れたが、Claverhouse は女性的と言える程洗練された物腰、その英雄的な華やかさの陰に、恐るべき冷酷性がひそんでいるし、Evandale 卿は、冷静な理性を持って物事を判断できる反面、古い社会意識から脱却できないでいる。Burley は宗教上の熱情と悪魔的非情を併せ持っている。Mause は息子Cuddie が裁かれる場面に居あわせて、反乱軍に参加しなかったと偽証することで、息子の「魂」が呪われることを恐れ、同時に、真実を告白して息子の「肉体」が安全でなくなることも恐れて苦しむ。(ch. 36) 一方Cuddie は Jenny と結婚する前は、母に手綱を引かれ、結婚後は、すっかり妻の尻に敷かれた身の上を嘆く。(ch. 38)

最後にこの「二面性」が極立った例として、Bothwell 軍曹を挙げてみよう。彼はシュアート王家の流れをくむ名門の出なのだが、低俗野卑を好み、すっかり一兵士の気儘な生活が身についている。戦場にあっては有能だが、巡察などに当っては、横柄、暴虐、貧欲で鼻つまみ者である。所が彼がBurley に殺された後、彼の懐から発見されたのは、20年も前に書かれた優しい女性の筆跡による恋文の束だった。自堕落な毎日を送っているながら、彼の心は秘かに、速い若い日の幻影を追い求めていたのだ。(ch. 23)

このように見てくると、この「二面性」をもって描かれた部分は、すべて、この *Old Mortality* あって、極立って印象的な部分ばかりである。このことから、スコットが創作にあたって、如何にこの「二面性」を駆使して、この作品を組立てたかがよく理解できる。

III

Old Mortality において、「二面性」は、今述べたように、小説全体の骨組みでもあり、又細部の描写における肉付けとなっていることが理解できる。これは勿論 *Old Mortality* に限ったことではないので、殆どすべてのスコットの

作品で、多かれ少なかれ、この「二面性」がその中心となっているのを知ることができる。このことから、スコット文学の本質の一つは、この「二面性」であると断定しても、決して過言であるとは思われない。

所でこのスコットの二面性に関して、Edwin Muirは、その名著 *Scott and Scotland* において、「二面性」「二重性」はスコット文学の特徴であるばかりでなく、広くスコットランド人すべての「悲しむべき特性」となっていると述べている。¹⁸ スコットランド人全体の「二面性」となると、話がやゝ漠然としてくるので、この問題はさておき、スコット文学の「二面性」について、Muirはスコットの生い立ちと教育、法律家としての生活、それに不幸に終わった恋愛事件、その他の要素が、夢見る多感な青年スコットに、情緒面と理性面とをはっきりと区別し、必要に応じて前者を隠すことを習性づけたために生れたものと述べている。私はこの説明だけで充分であるとは思われないが、多くの示唆に富んだ意見だと思う。

Muirは又 *Old Mortality* に関して、スコットは、英国の国家権力が、この反乱鎮圧を通じて、スコットランド本来の伝統や社会機構を破壊して行く過程を見ていると述べている。スコットは勿論理性的現代人として、スコットランドも含めた英国の国家、国王に対する忠誠心は持っているのだが、彼の胸の中に抑圧された情緒面では、スコットランド人としての愛国心が、消しても消しきれない炎をあげているのだ。この「二重性」をMuirは“*Divided allegiance*”（二分された忠誠心）と呼んでいるが、スコットは日常生活では、遵法者であるのに、文学の中では、スコットランド愛国者(つまり反逆者)に一変することができるのだ。Bothwell Bridge の戦いで、敵軍が目の前に迫っているのに、まだ内輪もめに終始し、統卒が乱れている反乱軍の面々に向って、Henryが切々と訴えた言葉は、そのまゝスコットの最早帰らぬ過去への憤りと、失われ行く祖国への痛恨な挽歌ということもできよう。¹⁹

"... I bring from the enemy an offer to treat, if you incline to lay down your arms. I can assure you the means of making an honourable defence, if you are of more manly tempers. The time flies fast on. Let us resolve either for peace or war; and let it not be said of us in future days, that six thousand Scottish men in arms had neither courage to stand their ground and fight it out, nor prudence to treat for peace, nor even the coward's wisdom to retreat in good time and with safety. What signifies quarrelling on point of church discipline, when the whole edifice is threatened with total destruction?..." (ch. 31)

(もしもあなたが武器を捨てる気になったのなら、私は敵軍からの和睦の条件ももらってきている。あなたがたが、もっと男らしい気性だったら、立派に敵を迎え撃つ方法も教えよう。時は刻々と過ぎて行くのだ。平和をとるか、戦いをとるかを決めようではないか。後の世になって、武装した6千もの我々スコットランド人が踏み止まって戦い抜く勇気もなく、和睦する慎重さもなく、好機を掴んで安全に退く憶病者の知恵さえもたなかったと言われぬようにしようではないか。教会全体が崩れ落ちるかもしれないこの時に、教義の点でいみ合うことに、一体何の意味があるのか)

スコットは内乱に明け暮れているうちに、遂には祖国スコットランドを押し流す歴史の営みに、決して満足をしていないのだ。彼は過去の世界をもう一度甦えさせたいと願い、Fictionの世界で、Henryに姿を借りて、あの腐甲斐ない信徒軍を叱責しているかのようである。

こういう見方をしてくると、先にも述べたように、Henryの描き方が、非常に悲劇的であることとも符合する。この作品に流れるペシミズムは、結局、スコットの古いスコットランドへの愛と悲しみから生れたものであり、この感傷は又、先に述べたように、作者本人の「二重性」の産物とも考えられるのである。

所がこのように見てきても、スコットがこの悲劇的な時代を題材にとりあげ、狂信と残虐、内乱と混乱の時代絵巻をこのように丹念に書き綴った真意についてだが、これについても、彼がただ一途に過去を告発し、救いのないスコットランドの悲劇を訴えたかったのだと、単純に理解することは危険である。たしかに、そのようなものも可成り重大な動機だったかもしれないが、彼の温厚な人と為りを知るものにとって、彼がそれ程まで徹底的に、社会批判とか、歴史否定をすることは思われぬ。この問いに対する答えは、実は本人の筆によって、まさに彼の「二面性」を浮き彫りにする形で与えられているのだ。このことはスコットの美意識とも大いに関係があると思われるが、彼はこの時代が、“melancholy”ではあるが “most attractive”な時代であると述べ、更に、

Revolting as all this is to the Patriot, it affords fertile materials to the Poet. ⑳

(このすべては、愛国者の眼には、不快極まることでもあろうが、詩人には豊かな題材を提供している。)

とも述べているのだ。つまり、歴史家の眼には、耐え難い程の醜い世界が、詩人の眼には、この上もなく美しい、というわけなのだ。スコットは、この血みどろな時代を、詩人の眼で美しいと感じ、文学に書き綴ったのである。

しかし、一方、歴史家スコットは、この不毛で冷酷な美しさを、きびしく批判している。この一見矛盾する「二面性」が、作者としてのスコットの本質であり、*Old Mortality*ばかりでなく、スコット文学全体の特色ともなっているのである。

〔注〕

- ① この訳名は、大和資雄氏「スコット」(研究社、1955)のものを使わせていただいた。
- ② J. G. Lockhart: *Life of sir Walter Scott*, p. 297
- ③ cf. Edgar Johnson: *The Great Unknown*, pp. 557-9
- ④ Lukács: *Historical Novel*.
- ⑤ Daiches: *Scott's Achievement as a Novelist*.
(*Modern Judgements: Walter Scott*)
- ⑥ *Ibid.* p. 52
- ⑦ cf. T. Crawford: *Scott*. p. 62
- ⑧ *The Fortunes of Nigel*, ch. 5
- ⑨ A. Welsh: *The Hero of the Waverley Novels*, p. 255
- ⑩ *Sir Walter Scott*(anonymous): *Review in Quarterly Review*, (*Scott: The Critical Heritage*) pp. 141-2
- ⑪ A. Welsh: *The Hero of the Waverley Novels*,
pp. 255-6
- ⑫ *Sir Walter Scott: Quarterly Review*
- ⑬ R. C. Gordon: *Under Which King?* p. 50
- ⑭ A. & J. Calder: *Scott*, p. 103
- ⑮ ゲーテはエッカーマンに、「ウォルター・スコットは、私の『エグモント』のある場面を使ったことがあるが、彼にはその権利があった。十分理解した上でやったのだから、彼はほめられていいのだ。」と語ったとのことだが、(エッカーマン: ゲーテとの対話、1825/1/18)スコットが借用したとゲーテが言っているのは、このWappenschawの射撃腕比べの場面に間違いはない。尤もスコット自身は、ゲーテから借用したという意識は余り持っていなかった模様で、「この種の行事は、欧州の各地でも行われているようだ」などと言っている程度

である。しかし、スコットの作品には珍らしく、自由や人間の権利などというものが、前面に押しだされていることからみて、この*Old Mortality*が自由の戦士エグモントの思想的影響を受けていることは可成り明らかである。ヴェルテル的感傷家Waverleyといい、エグモント的Henryといい、ゲーテ文学の影響は、かなりスコットの小説にも見ることができるようだ。

- ⑮ R. Mayhead: Walter Scott (Profiles in Literature), pp. 86-7
- ⑯ R. C. Gordon: Under Which King?
- ⑰ E. Muir: Scott and Scotland.
- ⑱ Ibid. pp. 144-5
- ⑲ Sir Walter Scott (Anonymous): Review in Quarterly Review (Critical Heritage), p. 129

参 考 書 目

- Edgar Johnson: Sir Walter Scott, The Great Unknown. Hamish Hamilton, London, 1970
- J. G. Lockhart: The Life of Sir Walter Scott. (1 vol.) Dent, London, 1906
- Scott, The Critical Heritage. ed. John O Hayden, Routledge & Kegan Paul, London, 1970
- Walter Scott (Modern Judgements). ed. D. D. Devlin, Macmillan, London, 1968
- Sir Walter Scott, An Edinburgh Keepsake. ed. Allan Frazer, Edinburgh University Press, Edinburgh, 1971

- Thomas Crawford: Scott. Oliver and Boyd,
Edinburgh, 1965
- Robin Mayhead: Walter Scott (Profiles in
Literature). Routledge & Kegan Paul, London,
1968
- Georg Lukács: The Historical Novel. (tr. by
Hannah and Stanley Mitchel), Penguin
Books, Harmondsworth, 1969
- Edwin Muir: Scott and Scotland. (Reprint of
1936 edition) Folcroft, 1971
- Robert C. Gordon: Under Which King? Oliver &
Boyd, Edinburgh, 1969
- Angus and Jenni Calder: Scott. Evans, London,
1969
- Robin Mayhead: Walter Scott. Cambridge University
Press, Cambridge, 1973
- 大和資雄: スコット. 研究社, 1955
- Alexander Welsh: The Hero of the Waverley Novels.
Atheneum, New York, 1968
- A. O. J. Cockshut: The Achievement of Walter Scott.
New York University Press, New York, 1969